

講道館柔道、タイを往く — その7 —

村 田 直 樹

前号迄のあらずじ。

タイ柔道協会道場へ挨拶に出向したその日、いきなり黒帯八人を相手に連続の勝負（＝八人掛け）を挑まれた私。それも一人から三本取る、という……。

柔道場の誰もが練習を止め、異国ビトに凝視される中、私は勝負を余儀なくされた。

組み際から勝負を賭ける、と短期決戦の戦法をたてる。長引いてはいけない。何しろ問題は、熱帯の熱さが敵のスタミナなのだ。

試合開始。

一人、二人、三人と、猛烈な勢いで右に前にと投げ続けるも、六人目あたりで息が苦しくなり、スタミナに赤ランプ。それでも頑張てどうにか八人目まできた。一本取り、二本目も投げ、そしてあと一本の三本目、寝技となる。うつ伏せの相手の背後から、私は絞技をねらって相手の首に手をかけた。と、その瞬間、相手は私を背負ったまま、渾身の力をふり絞ってうつ伏せの状態から身を起こし、膝立ちに立ってそのまま勢いよく後ろへ仰向けに倒れてきた。ドゥッと音がして、二つの身体が仰向けに重ね餅。私は相手の下で、後頭部をしたたか打った。

（この野郎、反則じゃないか！）

と内心叫ぶも束の間、グワーンと脳震盪が襲い来て、そのまま何も分からなくなってしまった。

* * *

直ぐ目の前に、何やら浅黒い肌のヒトの

後頭部がある。圧迫感があり、私の身体は仰向けで、浅黒い肌のそのヒトが、これと同じように仰向けで私の身体に乗っていた。誰だこいつは、重いじゃないか。

ワァワァワァ。ワァワァワァ……。

ざわめき声が近く遠く聞こえてきた。

— そうだっ。俺は戦っていたんだ。

ハッと意識が戻った。

— 反則だ。反則をやられて頭を打ったのだ。

そう記憶が蘇ったら、闘魂がメラメラと燃えてきた。

自分の身体が下にある。仰向けのその上に相手の身体が乗っている。よーしっ。下から攻めるか。それとも上に回って上から攻めるか。戦術は唯一つ、絞技のことしか頭になかった。絞め落としてやる……！

（注：落とす＝首を絞めて気絶させる、の意。
この意味に於いて、柔道の用語と言ってよい。）

私は残忍な鬼神と化した。

上に回って馬乗りとなり、正面から十字に絞め、相手の苦悶の顔をたっぷり拝んで落とそうか。

重大な反則をされて頭に来ていた。

それだけじゃない。その反則をとらぬ審判にも腹立たしかった。私はそれまで七人を勝ち抜いてきた疲労困憊で（一人から三本ずつ！）最早、理性を失っていたようだ。

下敷きから脱して私は、首尾よく上になる。馬乗りになったら、相手は両腕を突っ張ってきた。関節技の絶好のチャンス！柔道を知る者ならば誰もがそう思ったろう。

しかし私はそれを無視した。

ああ、この時私はハッキリと、自分が今、勝負師とはなっていないことを知らされた。勝負師の目的は何であろうか。それは勝つことである、最効率で。だから勝つチャンスがあれば逃がさず、機を敏に勝負する。そして最小の努力で目的を達成する、がプロであろう。

私はどうしたか。

目の前に転がり来た勝利の機会を意図的に無視したのである。自分の胸元に伸ばされてきた相手の腕を関節技に取ることなく、そのまま放置した。取れば優に十字固めで一本取れ、そこで決着がついて、法外な八人掛けも終わったであろうに。

相手を攻める私の額から、汗がポタポタと落ちていた。馬乗りの私と下の相手の目が逢った。突っ張る相手の両腕に分け入らんと私は上体を押しゆき、相手の両肘を屈した。問答無用の強引な中央突破策。

相手も負けていなかった。

私の圧力で屈せられた両肘を、もの凄いや力で押し伸ばす。まるで起重機。私の胸元に当てられていた手がいつの間にか移動して、どうも苦しいと思ったら、こちらの喉仏を押ししていた。

この野郎っ、また反則じゃないか。拳で喉を突くんじゃないっ。

怒髪衝天。私は我を忘れたか、馬乗りで相手の胸倉をつかんだまま透かさず横に転がり、自ら下になっていった。そうするが速いか、今度はそこから自分の片脚を正体する相手の肩口にサッと掛け首を巻き、もとより伸びている相手の腕の片方を引っ張り込み、ガッチリと極めたり三角絞。それだけではない。引っ張り込んだその腕を、グーッと肘を逆にした。

ギャーッ。

阿鼻叫喚七頭八倒。苦悶でクシャクシャの顔。私は構わず、渾身の力を籠めて絞り上げた。

アオーギャーッという咆哮にも似た唸り声を聞いたと思った瞬間、相手が急に重くなった。失神したのである。

私が、相手の首に巻きつけた脚を解いた時、相手の身体がドサッと私の上に落ちてきた。口元に泡を吹いて。

私はあわてず、浅黒い肌の失神した敵の身体を退け、黙って立ち上がった。

ハハハハハ。(やったぞ……。)

私は大きく肩で息をした。足元に背を見せて失神している相手を見下した。観衆はこの光景に息を呑んだ。先刻より審判をしてきた協会長は、怒りに目を三角にして、射らんばかりに私を睨んでいる。唇が震えていた。

気が付いて見たら、私の柔道衣は乱れ、胸が開けていた。その胸は、まるで水でも浴びたように汗びっしょり。熱さの中で私の心臓は鳴りっ放しだった。

しかし場内はこの時、シンと静まりかえっていた。

このまま帰ろうか、と思った。失神して足元に倒れる相手もそのままに。放って置けばいつか息を吹き返すだろうと冷酷だった。

しかしそれもほんの少しの間のもので、次の瞬間、私は腰をかがめ、背を見せてノビている相手を仰向けに起こし、日本伝来の活法を施した。

蘇生 —。

相手は虚ろな表情で私を見た。二、三秒後破顔一笑。仰向けのまま、ニッコリ笑った。笑顔の中のこぼれるような歯の白さが素晴らしかった。彼は立ち上がり、汗を拭って握手を求めた。私は荒い息遣いのまま、

差し出された彼の手をしっかりと握り返した。

ヤレヤレ。終わったようである。

柔道衣の乱れを直し、整列するタイの黒帯八人と最後の礼を交す。この時観衆から、大きな拍手が湧き起こった。

負けないで良かった。引分けられないで良かった。何しろ暑さが心配だった。もうやらないぞ、こんな事……。

この八人掛けをじっと観ている青年が居た。彼は柔道衣を着ていなかった。観衆の笑い声にも声援にも別段耳を貸すふうでもなく、後ろの方でじっと見詰めていた。

八人掛けが終了し、私が群衆から解放されてシャワー室へ向かっている時である。眼鏡の奥の瞳を輝かせ、その青年が来て言った。

「アチャーン ナオキ。サワディックラップ。」(直樹先生、初めまして。)

合掌する掌底が、額の所まで持ち上げられていた。

「サワディックラップ。クン チューアライナ クラップ?」(こんにちわ。どなたですか。)

と私もタイ語で応じる。

「クン ブーットゥ タイ ゲング!」
(タイ語がお上手ですね。)

と直ぐに賞めてくるところは、何処かの国の人とそっくりの対応だ。いやいや、それ程でも……と答えない。お賞めにあずかり有難し、と簡明直截に応じるのが向こうの遣取。

「コブクン クラップ。」(有難う)

彼は言った。

「ボム チュー スリチャイ=ワンケーオ。」
(私はスリチャイ=ワンオケと申します。)

「私は今、貴方の試合を観ていた者です。」

「疲れたでしょう。一度にあんな風に戦うなんて。」

「でも、一度に八人も相手にして戦うその目的は何なのですか。」

私は返答に窮した。言葉が見つからなかったのは、私の貧しきタイ語のせいばかりではなかった。その訳は、柔道の方では新しき場所に赴任の際、大抵の場合、五人掛けが行なわれ、それは殆ど常識に近かったからである。

青年は続けた。

「貴方の強さの誇示ですか。八人相手にしても負けぬ、という。柔道は見世物ですか。」

「いや、そういうつもりでやったんじゃない。挑まれたんだ。だから受けたんだよ、その挑戦を。」

「でも、受けずに済ませることもできたでしょう。」

「……………」

私は協会長の挑戦的の眼差を想い出していた。挑戦されたその時、やるか、と思った。次にしかし、とも思った。そしてそのしかしは、熱帯の暑さに負けるかも知れぬ、だからよそうか、という計算だった。この計算とは詰まる処、負けるのならイヤ、というプライドが前提されているものだろう。そしてさらに、挑戦された、逃げないぞ、という内なる声もまたプライドであったろう。

八人相手にしても負けないという強さの誇示ですか、と聞いたこの青年の声が、汗だくの私の脳裡にずんずん込み込んできた。しかし、何故か、言下にそうだと答えられなかった。

青年は続けた。

「それにしても暑かったでしょう。四月、

五月はタイでは一番暑い季節なのです。日本は新緑の、一番過ごし易い季節でしょうね。」

よく知っているじゃないか。

そりゃー暑かったよ。苦熱さながらで、逃げ出したい程だった。しかし私は、初対面のこの青年に、内なる声とは全く反対のことを言った。

「いや、何かに熱中している時は、暑さ寒さを忘れてるよ。」

「ハハハ。タイ人はいつでも暑いことを忘れません。」

私は続けた。

人間の五感があてにならぬことは、日常しばしば経験するところである。夢中で何かをしている時、暑さ寒さは気にならないし、懐の暖かいヒトも居れば、師走の風が身に沁むヒトも居よう。気の持ち様だ。心頭滅却すれば火もまた涼し、の言葉もあると一。

「面白い言葉ですね。日本人はその様に考えるのですか。精神力を強調するんですね。その言葉について、もう少し聞かせてくれませんか。」

とんだご発展と相成った。しかし私も引かず突っ張った。

この言葉はですネ、信長に焼き打ちされた恵林寺の快川国師の言葉として有名なのだ。

織田・徳川連合軍の猛攻で、武田勝頼は居城を捨てて敗走し、菩提寺の恵林寺(山梨県塩山市)に逃げ込んだ。この寺の住職、快川和尚が包囲軍の目前で、燃える山門の楼上に端座し、泰然自若としてこの言葉を唱えながら焼死したことで有名になったのだ。

雑念を払い、無念無想の境地に到れば、熱い火の中に在っても熱さを感じず、かえ

って涼しさを感じるものだ、という意味だよ。

原典がある。中国六世紀の詩人、杜荀鶴の詩がそれだ。

『三伏、門を閉ざして一衲を披す。兼ねて松竹の房廊を蔭^{おのづか}ら無し。安禅は必ずしも山水を須^{もち}いず。心頭を滅却すれば火自ら涼し。』

青年よ、分かるかい。

炎暑の季節なのに師は門を閉め切り、破れ衣をまとってられる。庭には蔭をつくる樹木もない。しかし坐禅には、別に静かな山中や水辺でなくてもよいのだ。師の様に、心を空にすれば、火の様な暑さも苦にならない、とそういう意味さ。

じっと青年は聴いていた。

そして正直に、よく解りません、と口を開いた。無理もない。私は、以上の話を日本語、英語、タイ語混じりでやったのだから。意が十分通じ得た、とは誰が聴いても思うまい。

私はしゃべりながら、言葉の重要性を痛感させられていたものだ。日本人のみを相手にした、日本人向けの作業なら、唯々日本語を道具にしていればそれでよい。しかし、こと国境の枠を外すなら、何よりもまず言葉じゃないか。理解も誤解もまず、言葉、言葉、言葉から、と一。

青年との再会を約し、私は独りシャワー室へ入って行った。

ジャージャーと頭を叩くシャワーの水が、火照った身体に快かった。私はしばらくそのままだった。

あの青年は一体私に何を言いたかったのだろう。その思いが、シャワーの雨の中で私の脳裡を掠めていた……。

つづく